

### 第3章 作戦環境に係る総合評価 — 敗戦に向けた準備 —

ウィリアムソン・マーレー<sup>1</sup>

世界に対する我々の認識と世界の諸問題に知的に対応する能力は、我々が知っている歴史だけでなく、知らない物事によっても形成されている。無知であること、特に教育を受けた男性の無知は、知識よりも厄介な力となり得る<sup>2</sup>。

今世紀初頭、アメリカ統合軍司令部の一人で、米軍の、あの掃き溜めのような集団の中では思想家とみなされていた人物が「作戦環境に係る総合評価 (operational net assessment)」という名のコンセプトを打ち出した<sup>3</sup>。このコンセプトは、軍司令部の中だけでなく国防省の中でも少なからぬ注目を集めた。それどころか、いくつかの巨費を投じた演習が計画、実行され、アメリカ人の血税の多くが無駄に使われた。しかし最後に、米軍で最も教養のある最高幹部の一人とされるジェームズ・マティス海兵隊大将が統合戦力軍コマンドの司令官に就任し、速やかに人事の刷新を行い、「作戦環境に係る総合評価」や「効果に基づいた作戦 (effects based operations)」など、これらの数々のコンセプトを「役立たずのポチョムキン村 (政治上の見せかけ)」として切り捨てた。

では、いったいなぜ、すでに米軍の用語集から完全に抹消された、この何の役にも立たない愚かな取り組みについて今さら論じるのか。そこには、これから先の戦後期・戦間期<sup>4</sup>を迎えるにあたり、米軍だけでなく同盟国の軍に多少なりとも影響を

---

<sup>1</sup> 米国オハイオ州立大学名誉教授

<sup>2</sup> Michael Howard, *The Lessons of History* (New Haven, CT, 1991), p. 16.

<sup>3</sup> 驚いたことに、引退した陸軍大佐であるこの人物は、「総合評価 (net assessment)」という概念に40年間にわたって取り組んできた国防省総合評価局 (Office of Net Assessment) に問い合わせ、当局やアンドリュー・マーシャル局長の意見を聞くことを一度たりともしていない。

<sup>4</sup> イラク・アフガン戦争からみた戦後・戦間期の意味 (編集部注釈)

及ぼすであろう教訓が存在していると思うからである。この話は、専門的な軍事教育の重要性に関するものである。もし、その重要性を軽視すれば、私たちが戦争と呼ぶあの殺人的で不確かかつ困難な営みの中、軍事力の行使という重要な任務に間違いなく直面するだろう軍上層部のなすべき準備に対して、有害な影響を与えることになるだろう。

この話は1970年代から1980年代に遡る。米軍がベトナム戦争という、いかなる面から見てもアメリカ合衆国の歴史の中で体験した最悪の戦略的敗北の悲惨な経験から立ち直り始めた頃のことである<sup>5</sup>。当時、米軍はキューバ危機の直後から始まったソ連軍の大々的な増強に直面し、またその間、徴兵制から全志願制の軍隊へと転身した。数ではソ連軍にかなわず、もちろんソ連との核戦争を望むわけもない中、米軍は「ニュールック戦略」のもとで高度な訓練と技術的優位性に重点を置いた<sup>6</sup>。パイロット、兵隊、兵器システムの性能を精密に再構成した、注意深く厳密な分析に基づく訓練の大変革により、人類史上まれに見る実戦に近い訓練が生まれた<sup>7</sup>。「レッドフラッグ」、「トップガン」、「29 パームズ」、陸軍ナショナルトレーニングセンターなどの訓練場では、アメリカ陸軍と空軍が平時における軍としては卓越した有効性を持つまでに鍛え上げられ、その結果は1991年の湾岸戦争ではっきり示された。

同じように目覚しい進展を遂げたのが、アメリカの兵器システムの技術的な精巧さの向上である。1980年代半ばには、ソ連のニコライ・オガルコフ元帥が、アメリカの軍備における技術イノベーションは「従来の兵器の破壊力を（少なくとも10倍単位で）急増させ、有効性という点では大量破壊兵器に近いレベルにまで向上させ

---

<sup>5</sup> 戦術的に米英戦争（War of 1812）での米軍陸上部隊の功績はもっとひどく、英国に首都を焼き落とされたが、最終的には（名声以外の）戦略的損失はまぬがれた。

<sup>6</sup> 「ニュールック」の軍とは、朝鮮戦争後のドワイト・アイゼンハワーによる軍のキャッチフレーズであったが、この時期の米軍にもびったりと当てはまる。

<sup>7</sup> 第二次世界大戦中のドイツ軍の戦術訓練も戦場での戦いに備えて有効であっただろうが、多数の兵士の犠牲のうえでしか実現できなかった。

ることが可能」とコメントするほどの精巧さを誇った<sup>8</sup>。ところが、アメリカのアナリストはアメリカの軍備に大きな変化をもたらした精度とテクノロジーの大幅な向上を見落としていたばかりか、ひとたび従来型の戦闘を行った場合、その訓練法によって培った米軍の戦闘部隊の優位性を十分には認識していなかった。このため、1991年初めの第一次湾岸戦争に向けての準備期間において、イラン・イラク戦争での経験によって鍛え上げられたとされたサダム・フセインの軍隊の軍事的有効性について、アメリカの防衛アナリストたちの間で相当な懸念があったことは驚くに値しない<sup>9</sup>。

1991年の1月と2月に米軍が圧倒的な勝利を収めると、アメリカの市民ばかりでなく軍関係者の多くも大いに驚いた。大統領はベトナム戦争のトラウマが癒えたと宣言した。その戦いに対する米軍内部の評価はほとんどが自画自賛であった<sup>10</sup>。フセインを倒せなかったことは、少なくとも部外者にとっては比較的ささいなことのように思えた<sup>11</sup>。

そのことが後に、知らず知らずのうちに大惨事へとつながる道を作ることとなった。将校団だけでなく分析コミュニティの中でも、あまりに多くの者たちが新しい時代の幕開けだと信じていた。テクノロジーによって、米軍は今後、戦場から摩擦(friction)を取り除くことができるようになる。高い精度によって、米軍は今後戦場において前代未聞の殺傷率を実現することができるようになる。そして今後、敵の一挙手一投足が米軍の偵察システムの監視の下に置かれることになる。これに対

<sup>8</sup> Williamson Murray and Allan R. Millett, *Military Innovation in the Interwar Period* (Cambridge, 1996), pp. 376-377 の Barry D. Watts and Williamson Murray, "Military Innovation in Peacetime" に引用されている。オガルコフの言外の発言により、大規模な増強の結果手に入れたソ連の軍事的優位性をアメリカの進歩が帳消しにしたという認識が生まれた。

<sup>9</sup> イラン・イラク戦争で「鍛え上げられた」とされたイラクのすさまじい軍事力を嘆いた専門家もどきの中にはエドワード・ルトワックが含まれていた。著者はクワンティコで、連合軍がイラク軍と戦った場合、1万人を優に超える死傷者が出るであろうと、地上戦の直前に海兵隊の将校たちが議論しているのをしばしば、耳にした。

<sup>10</sup> 唯一の例外は *Gulf War Air Power Survey* であったが、これは空軍が組織ぐるみで猛反対したにもかかわらず、ドナルド・ライス空軍長官が研究グループを立ち上げたために行われた調査である。

<sup>11</sup> だが、イラク人にとっては別の事情があった。フセインは、アンバール県を除くイラク全土で勃発した反乱を鎮圧するために武装ヘリコプターとガス兵器を使っていたのだ。プッシュ大統領はイラク人には抵抗するようと呼びかけておきながら、独裁政権の残虐行為から彼らを守る努力をしなかった。

し、残念なことに、軍の教育機関であるはずの幕僚課程や戦略大学などからも十分な反論がなかった。こうして、アメリカの軍事システムは、将来の将官や司令官たちに戦争の基本的な性質や彼らが乗り出す戦争のコンテクストを把握することの重要性について理解させるための教育を授けることができなかった。その失策は、アメリカの専門的な軍事教育システムの欠如によるところが大きい<sup>12</sup>。

人間の職業の中で、軍人は肉体的だけでなく頭脳的にも最も厳しい職業である<sup>13</sup>。ベトナム戦争と湾岸戦争の戦間期は、戦争の物理的な側面、すなわち戦闘のための訓練、戦術、作戦準備の絶好の期間となった。一方、知的な側面については、まったく満足いくものではなかった。外部の一般大学はもちろん、ニューポートの海軍戦略大学にさえ、海軍は優秀な一選抜の士官を送ろうとはしなかった。一方で、専門的な軍事教育を行うその他の主だった機関では、軍事学にはほとんど焦点を合わせていなかった。それどころか、軍は幕僚課程や戦略大学を忙しいキャリアの中での将校たちの憩いの場所とみなしているようであった<sup>14</sup>。言い換えれば、専門的な軍事教育システムが、技術的な変化によって軍事力がどのように変わるかを理解しようとする、真剣な研究と誠実でたゆまない努力の場として特徴づけられていた世界大戦の戦間期と異なり、ほとんどの幕僚課程や戦略大学は、本物の教育が行われない退廃した場所になってしまった<sup>15</sup>。世界で唯一の主敵であるソ連に備えるだけでよいならば、それでもよかったのだろう。

事実上、米軍は一種類の戦争、つまり北部ヨーロッパの平原での赤軍の勝利を阻

<sup>12</sup> そのためには、まずはクラウゼヴィッツ、孫子、トゥキユディダスの古典に重点を置き、未来の将校たちのために論理的かつ歴史的な準備を周到に行う必要がある。1998年当時、陸軍士官学校ではトゥキユディダスや孫子は一切読まず、「戦争論 (*On War*)」を10ページほど読んで1時間のセミナーで話し合っただけであった。

<sup>13</sup> クラウゼヴィッツは「我々の見解では、若い指揮官たちも卓越した知的能力が求められる…」と提言している。Carl von Clausewitz, *On War*, trans. and ed. by Michael Howard and Peter Paret (Princeton, NJ, 1976), p. 111.

<sup>14</sup> 海軍士官学校は1970年代初頭、スタンスフィールド・ターナー提督の指導の下で苦痛を伴う変革を行った。提督は将校の教育に大学院レベルのアプローチを取り入れて、優れた戦略研究のコースを作った。このコースは今でも戦略研究へのアプローチのあり方を示す手本となっている。

<sup>15</sup> 当然ながら例外もあった。特に海軍戦略大学と幕僚課程での2年間のプログラム (the School of Advanced Military Studies at Fort Leavenworth, the School of Advanced Warfighting at Marine Base Quantico, the School of Advanced Airpower Studies at Maxwell Air Force Base) である。残念ながら、これらの学校は将校団のごく一部にしか教育を授けていない。

止する従来型の戦争を戦うためだけに訓練を受けることとなった。戦争と戦略を幅広く理解しようとする真剣な知的準備は存在しなかった。1991年と2003年に、米軍はこれまでの準備にうまく合った従来型の戦争に臨んだ<sup>16</sup>。いずれの戦争も、十分な更新がなされず、赤軍がもはやまったく使わなくなったような装備を使用する第三世界の敵国に対して圧倒的な勝利を取めるという、さして驚くに値しない結果となった。

佐官級の将校たちのほとんどがベトナム戦争で多くの経験を積んでいて、机上の戦争、理論上の戦争ではなく本当の戦争を体験し、その現実を知っていた1970年代や1980年代であれば、専門的な軍事教育の脆弱さはたいした問題ではなかった。彼らは、戦争を簡単で予測可能な競技に変えてしまうテクノロジーという名の魔法の杖など存在しないことを十分承知していたからだ。しかし1990年代になると、米軍内におけるベトナム戦争帰還兵の数はどんどん減少していった。そして、戦争においては、戦略だけでなく、戦争の背景にある政治的な文脈の理解、残忍で訓練の行き届いた意欲旺盛な敵と戦っているとの自覚、これらのすべてが重要であるということを経験してきた高級将校たちも徐々に引退していき、戦略的・技術的な刷新が行われてきた米軍組織の中で育った、南ベトナムや北ベトナム上空での戦闘を経験したことのない、戦争の現実を知らない者たちに取って代わられていった。

その結果、特に海軍や空軍で、そして陸軍でも多くの将校たちにとって新たな時代が幕を開けた。米軍の高度なテクノロジーが前代未聞の軍事力を発揮する時代である。大体の内容としては、米軍の持つ圧倒的な技術的優位性とコンピュータの絶大な処理能力によって、クラウゼヴィッツが「摩擦」と呼ぶものも「戦闘空間 (battle space)」から取り去ることができるであろう、というものである。言い換えれば米軍は、愚かにもアメリカに刃向かう敵たちに対してペンタゴンが「戦闘空間の支配 (battle space dominance)」と呼ぶ状態を実現することができるであろうと

---

<sup>16</sup> 幸い、フセインは比較的能力のある側近の司令官らからアドバイスがあったにもかかわらず、反乱戦を行う準備をしなかった。イラクの戦争準備と、フセインが自らの政権を守るためのコンセプトと仮説については、Kevin Woods, Michael R. Pease, Mark E. Stout, Williamson Murray, and James G. Lacey, *The Iraqi Perspectives Report, Saddam's Senior Leadership on Operation Iraqi Freedom from the Official Joint Forces Command Report* (Annapolis, MD, 2006)を参照。

考えた。中には、米軍が敵に対して、いわゆる「情報支配 (information dominance)」をすることができるという、かなり奇妙な推論もあった。皮肉なことに、イラク侵攻の初期段階でCNNに「(我々は) 情報レポートに溺れている」という有志連合の情報部長の言葉を引用されてしまった。

最も突飛な議論は、アメリカ統合参謀本部副議長のビル・オーエン司令官が広めたものである。技術力の進歩によりアメリカは200マイル四方で起きているすべての事象をリアルタイムで見て把握することができる、とオーエンは主張した<sup>17</sup>。さらにオーエンは、さすがに「非線形の世界でも解明できる」とは言わなかったが、アメリカのコンピュータの処理能力は「戦場から摩擦を取り除くことができる」と、常識からしてあり得ない主張をした<sup>18</sup>。こうした見解が将校団の中でかなりの支持を集めたばかりでなく、イラクの悲劇において惨めな役割を果たすこととなったポール・ウォルフowitzやドナルド・ラムズフェルドなどの民間人の間でも広まっていたことは特筆すべきである。

1990年代、シンクタンクのアナリストたちは「効果に基づいた作戦 (EBO: effects-based operations)」、「迅速かつ決定的な作戦 (RDO: rapid decisive operations)」、「情報支配 (information dominance)」、「軍事における革命 (RMA: revolutions in military affairs)」、そしてもちろん「作戦環境に係る総合評価 (operational net assessment)」といったコンセプトに関する論文をせっせと書き、ブリーフィング用の図表をまとめた<sup>19</sup>。この技術革命が、どのように軍事に関する過去の考え方を覆すのかについての理解を広めるために、これまでの「戦いの原則」を書き換えるべきだと提案する試みさえあった<sup>20</sup>。実際のところ、こうしたコンセプトはまったく歴史

<sup>17</sup> William A. Owens and Ed Offley, *Lifting the Fog of War* (New York, 2001) を参照。

<sup>18</sup> このナンセンスな主張に対する鮮やかな反論については、Barry D. Watts, *Clausewitzian Friction and Future War* (Washington, DC, 1996) を参照。

<sup>19</sup> 「軍事における革命」のコンセプトに対して常識のある、歴史に基づく理解をもたらしようとした総合評価局での努力もむなしく、アンドリュー・マーシャルは、この件についてほとんど成果を出せなかった。このコンセプトの歴史に基づく考察については、MacGregor Knox and Williamson Murray, *The Dynamics of Military Revolution, 1300-2050* (Cambridge, 2000) を参照。

<sup>20</sup> 著者はそのような取り組みに参加を要請された。論文“Changing the Principles of War?”は著者のエッセイ集に収録されている。Williamson Murray, *War, Strategy, and Military Effectiveness* (Cambridge, 2011) を参照。

的な根拠に基づいていなかった。ほとんどの著者が歴史に関してまったくの無知であったか、もしくは、到来するテクノロジーの大革命についてあまりに熱狂していたために、米軍のこれからの可能性に対して歴史研究や教訓などはまったく妥当性がないものとして棄却してしまったか、そのいずれかであった。

クラウゼヴィッツは、彼の時代にもあった「理論」のナンセンスな言説に対して、すばらしい批評を残しているが、米軍内で起きていたこととまさに合致している。

さらに深刻なのは、こうしたシステムに付加されていく業界用語 (*jargon*)、専門用語 (*technicalities*)、比喩 (*metaphors*) の危険性である。厄介な同調者の一群があちらこちらに蔓延する。また、そのシステムが本当に妥当だとは思っていなかった批評家たちも、自分自身ではまだ気に入ったシステムを見つけていない、あるいは、まだそこまで考えが至っていないという理由で、そのシステムの断片を標準的な理論かのようにして取り上げる。こうして本来、理論的で厳密、かつ平易であった言説は、少なくとも著者自身は自分が主張していることを理解し、読者も自分が読んでいる内容を理解できるような簡要な議論ではなくなり、専門用語ばかりを盛り込んで、しまいには曖昧な結論で読者を煙に巻くようなものばかりになってしまった<sup>21</sup>。

事実、未来の戦争に関する数多のコンセプトや理論が壁に突き当たった理由の一つとして、これらが過去の戦争からの教訓や戦争の現実と関連していなかったという点が挙げられる。コンセプトの熱心な信奉者たちは、未来の戦争を検証する上で過去の歴史はもはや取るに足らないという凝り固まった考えを吹聴していた。つまり、コンピュータとテクノロジーが歴史研究に取って代わったというのだ。そして、王様が裸だという事実を見抜くことのできない歴史認識の欠如した軍高官たちの世界観 (*Weltanschauungen*) に、このようなコンセプトが入り込み、彼らの多くが、

---

<sup>21</sup> Clausewitz, *On war*, pp. 168-169.

2003年夏から2006年までのイラクにおける反乱鎮圧作戦への対応にあたることとなった。

米軍がベトナムから撤退したとき、彼ら高官たちはいたって単純な2つの基本的な結論を導いた。第一に、ソ連が欧州やその他の地域に与えている軍事力の、あるいは核の脅威を踏まえ、アメリカ合衆国はハイエンドでの戦いを行う準備をする必要があった。このため、対反乱型の戦争に米軍が対応するのは適切でないとした。今にして思えば、当時のソ連の脅威の大きさを考えれば本質的にはその仮定に誤りはなかった。ところが、ソ連が「歴史の掃き溜め<sup>22</sup>」行きとなり、もはや存在しなくなった世界における脅威に対して、米軍がどれほどうまく対応できるかという点にその問題の危険性が潜んでいた。

第二の結論は、アメリカ合衆国が近い将来、対反乱型の戦闘を行う可能性は低いことから、将校団はそのような争いについて学ぶ必要はない、というものだった。東南アジアに何度も遠征して戻った者たちの立場からすれば、この第二の結論は理にかなっていた。彼らは身をもって反乱を体験してきたからである。この想定の問題は、1990年代初頭になるとベトナム戦争での経験が将校団のみならず軍上層部の中でも徐々に薄れていったという点だ。戦史の学習にまったく重点を置いてこなかった専門的な軍事教育システムの中では、1972年以降に入隊した将校たちは、対反乱型の戦争、当時で言うところのゲリラ戦に対する過去の教訓についての本格的な教育を一切受けていなかった。

軍事史や戦略史についても言えることだが、本格的な戦争史の教育を経験することは非常に重要であり、これにより、将校たちはパターンを認識する能力を身につけることができ、現在の紛争のパターンを認識することにより、軍指導者は自分たちが戦っている戦争の本質を認識することができるのである<sup>23</sup>。つまり、適切な問いを立てる能力は、理論上の経験や仮説ではなく、人そのものに備わるのである。適切な問いを立てる能力がなければ、今、自分たちが戦っている戦争を理解すること

<sup>22</sup> レオン・トロツキーのことば。

<sup>23</sup> 軍人の専門性を涵養するうえでの歴史の重要性の考察については、Williamson Murray and Richard Hart Sinnreich, *The Past as Prologue, The Importance of History to the Military Profession* (Cambridge, 2004) を参照。



などできない。同様に、もし問いを立てた者自身が適切でなければ、いかに精緻な分析が行われようとも、結局、間違った質問に対しては、見当違いなものか、あるいは非常に危険な誤解を招く答えが出てくるのは当然である。

また歴史的にみて、平時にうまくイノベーションを起こせる軍事組織と、戦争の実情に適合できる組織との間には相関関係があることがわかっている<sup>24</sup>。これまで軍事組織は、次の戦争のパラメータを程度の差はあれ必ず間違えて設定してきた。多くの場合、次の戦争が起こる前の段階での構想が現実と合致していないためである。この意味において、指揮官自らが戦うことになる戦争の本質を把握するために必要な知的ツールを授ける上で、平時における士官たちへの教育は不可欠なものであると言える。そして、少なくともその教育は、軍事学や戦術・作戦上のイノベーションの可能性について考察するだけでなく、厳密に、批判的に考える能力を磨くべきである。作戦の詳細、軍事文化、指揮の本質、過去の偉大な將軍や提督たちによるリーダーシップについて学ぶことで、将校たちは将来重大かつ現実的な判断を下す上で不可欠な能力を身につけることができる。

ジェームズ・マティス大將は、職業専門能力開発の一環として歴史を学ぶことの必要性に疑問を呈する学生らを教える国防戦略大学の某教授に宛てて送ったEメールの中で、軍人という職業における歴史の重要性を、きわめて明快に表現した。

最終的に、歴史を真に理解することは、この世で新しいことに直面することはないということの意味する。『第4世代戦争』などと騒々しい有識者たちは、今日、戦争の本質が根本的に変わったのだ、あるいは、このような戦術はまったく新しいものであるのだの言うかもしれない。そうした輩に対して『実は違うのだよ』と、謹んで申し上げたい。アレキサンダー大王は、我々が現在イラクで対峙している敵に遭遇したとしてもまったく動じないだろう。この戦争に臨むわが軍指導者は、先人たちに学ぶ（ただ読むだけでなくじっくりと研究する）ことで相手部隊に大きな打撃を与える

<sup>24</sup> Watts and Murray, "Military Innovation in peacetime" p. 414 を参照。

ことができるはずである。我々はこの惑星で 5000 年にわたって戦いを繰り返してきたのだから、その経験を大いに活用するべきである。「ぶっつけ本番」で行動してうまくいく方法を模索している間に、遺体袋が山積みになるのを見れば、この職業における道義的に正しい指揮・指導のあり方とは何か、あるいは優れた人物の行動 (competence) によってもたらされる対価について考えを改めざるを得ないだろう<sup>25</sup>。

残念ながらマティス大将の E メールはあまりにも予言的であった。米軍のイラク駐留を率いる軍人だけでなく文官も、歴史からではなく遺体袋の数から学ぶことを選んだ。サダム・フセインの残虐な独裁政権崩壊後、米軍が占領を開始した際に直面した反乱は、現代のメソポタミアにおいて初めて経験するものではなかった。事実、英国が 1920 年に現在のイラクにあたる領土の占拠を開始した際の最初の数年間、イラクの部族による大規模な暴動に直面している。その当時、反乱を鎮圧する任務を受けた英国の大將は当時のことを回想録に記しているが、それは 2003 年 4 月以降の米軍の駐留時の経験に気味が悪いほど類似している。回想録には彼の経験が次のように記されている。「メソポタミアに到着したとき、私は軍事的な案件にばかり気を取られていて、政治的な問題についてあまりにも知らなすぎたことを後悔している<sup>26</sup>。」この回想録を読むと、米軍の駐留はまさに「デジャブ、再び」であったことがわかる<sup>27</sup>。

しかし、1920 年のイラクの反乱が、20 世紀に起こった唯一の反乱の試みというわけではない。それどころか、従来型の戦争よりも対反乱戦のほうがはるかに頻繁に起きている。中央アメリカ、フィリピン、中国、マライヤ、ケニヤ、ギリシャ、ベトナム (1 回でなく 2 回)、イエメン、アルジェリア等々リストには終わりが無いほどである。にもかかわらず、1973 年から 2005 年の間に、これらの紛争が幕僚課程や戦略大学のシラバスで取り上げられたことは事実上一度もない。例えば著者は海

<sup>25</sup> 2003 年に国防大学の教授に宛てたマティス大将からの E メール。著者の許可を得て掲載。

<sup>26</sup> Aylmer I. Haldane, *The Insurrection in Mesopotamia* (London, 1922) を参照。

<sup>27</sup> 偉大なアメリカ人野球選手で哲学者ヨギ・ベラによる名言。

兵隊指揮幕僚大学で、アルジェリア紛争におけるフランス軍の経験を描いた「アルジェの戦い (*The Battle of Algiers*)」という映画について、自身の科目を選択している少佐たちに尋ねたところ、誰ひとりとして、観たことも聞いたこともないという返事にとっても驚いた<sup>28</sup>。将来の高級幹部となる将校たちの知的な準備課程から本格的な歴史の学習をなくしているようでは<sup>29</sup>、いかさま師が上層部に意見を聞いてもらうだけでなく、彼らを焚き付けることも容易であっただろう。

こうして、2003年には、「迅速かつ決定的な作戦 (rapid decisive operations)」と称される電撃作戦によりイラク軍を壊滅させることは至極簡単なことのように思われていた。ところが、残虐なサダム政権崩壊後に、それ以外の所から反乱が起きたとき、イラクに駐留するアメリカの司令官たちの中で、それに対応する準備ができていた者はほとんどいなかった。このような場面に對し、個人としてだけでなく、組織としても備えがなかったのだ。陸軍と海兵隊が現場の司令官たちを指導するための本格的な対反乱マニュアルの作成に着手したのは紛争が始まってずいぶん経ってからである。このように、反乱に対する戦闘は、彼らが受けてきた専門的な教育が仮想してきた軍事作戦のパターンに当てはまらなかったのである。反乱の最初の年に第一機甲師団長を務めたピーター・マンスール大佐は、多くの高級指揮官たちのこの時期の仕事ぶりについて次のようにコメントしている。

あまりに多くの最高レベル（師団長レベル以上）にある指導者（文官、軍人ともに）や、あるいは作戦本部の参謀、戦略的な行政管理部門のスタッフに配属された者たちが、長期戦略とそれを実行するための作戦構想の立案を犠牲にして、戦術ユニットで起きていることに関与しすぎていた。CJTF-7には作戦術についての構想がほとんどなかった<sup>30</sup>。部隊は当初、地元政府の管轄区域を跨いで駐留していた。やがてすぐに、反乱の中

<sup>28</sup> また、同紛争に関するホーンによる壮大な研究、Alistair Horne, *A Savage War of Peace, Algeria, 1954-1962* (New York, 1982) についても、誰も聞いたことがなかった。

<sup>29</sup> 例外的に歴史学その他の分野で綿密な学習を積み最高司令部の将校になるための知的準備を行った上級将校たちも存在する。

<sup>30</sup> 第7合同・統合任務部隊 (Combined Joint Task Force)。

心がスンニ・トライアングルにあることが明らかになったが、軍の部隊はイラク全土に比較的均一に配置されていた。兵力不足、ビジョンの欠如、意志の欠如などの理由からその地域における恒久的な駐留がかなわず、ファルージャが反政府活動の象徴となっても有効な対策がなされなかった。本来、多国籍軍の基地の集約化は、実効性のある地元治安部隊の創設を条件とすべきであったが、早く撤退することで [郊外の] 一部を反乱軍に譲る形となった<sup>31</sup>。

イラクではあまりに多くの米軍上層部が、長すぎる時間をかけて反乱対処法を学ぶこととなった。言い換えるならば、遺体袋の山の上に学んだのだ。その間に、反乱軍は地域に根を張り、支援を受けることができるようになってしまった。司令官らは平時における知的な準備を活かすことができなかった<sup>32</sup>。反乱1年目の彼らの仕事ぶりを見る限り、メソポタミア渓谷における近代の歴史はもとより、ベトナム戦争におけるアメリカの経験からも、応用できるような教訓などはまったくないかのようであった<sup>33</sup>。彼らは過去のパターンを認識する能力がなかったか、あるいは認識しながらなかった。残念なことに、アメリカ合衆国と米軍はベトナム戦争で犯したありとあらゆる過ちをすべて繰り返すこととなった<sup>34</sup>。

---

<sup>31</sup> ピーター・マンズール大佐 (Peter Mansoor) から著者へのEメール。マンズール大佐は現在、オハイオ州立大学レイモンド・マンソン教授である。

<sup>32</sup> 戦闘の責任を背負った第3歩兵師団の司令官バフ・ブラント (Buff Blount) 少将は、アメリカに帰還後、軍上層部および民間人のイラク駐留の最初の数ヶ月におけるリーダーシップ、彼らのイラクおよびアラブ文化に対する知識の欠如、ふくれあがる反乱軍の本質を認めたがらなかったことに関する著者の意見に対して大いに批判的であったが、その後ブラント少将は6年以上にわたりサウジアラビアでさまざまな職務に就いている。

<sup>33</sup> イラクでの戦争の最初の年にアメリカの民間人および米軍の派遣部隊に対する衝撃的な批評については、ドキュメンタリーフィルム *No End in Sight* を参照。

<sup>34</sup> こうした反乱に対する戦闘における教訓は明らかであるように思える。1) 戦争の政治的背景はすべて重要である、2) 外部の軍だけでは反乱軍を負かすことはできない、3) したがって、軍の最大の焦点は当事国の警察と軍隊の確立、構築であるべきである、そして4) 現地文化と政治、すなわち相手のことを理解することが重要である。

## 結論

この論文のように、すべてを「作戦環境に係る総合評価」などという無意味なコンセプトの悪影響のせいにするのはやや大きさに思われるかもしれない。だが、歴史や人間の争いの本質についての真摯な研究をまったく顧みないようなコンセプトの開発に、未だに焦点を合わせるもののほうが、より深刻な問題を招くであろう。単純に、1972年から2003年までの期間を通じて米軍は実務的な専門性に焦点を合わせすぎた。考える人ではなく、実行する人に重きが置かれた。しかし、もし私が間違っていなければ、軍人とは真剣な知的研鑽が求められる職業であり、本格的な専門教育に無関心であったばかりに、軍上層部はイラクおよびアフガニスタンの反乱軍と戦うはめになった者たちに多大なる損害を与えてしまった。

軍事組織は必ずと言っていいほど次の戦争で誤りを犯す、というマイケル・ワードの言葉は覚えておいて損はない<sup>35</sup>。自分たちが臨む戦争の本質と性質を軍の指導者が見極めることは非常に重要である、とクラウゼヴィッツは言う。

戦争によって何を達成するつもりか、それをどのように実行するかについて明確にしないまま戦争を始める人などいないであろうし、常識のある人ならば普通そうするであろう。これこそが [戦争の方向性を決め]、必要となる手段と労力を定め、作戦行動の細部までその影響を浸透させるための重要な原則である<sup>36</sup>。

クラウゼヴィッツは皮肉っているのだ。自分たちが臨んだ戦争の性質を事前に解明した政治的・軍事的指導者は歴史上ほとんどいないし、現実には直面しても、少なくとも敗戦や大惨事が目前に迫るまでは、自分たちの認識や仮定を進んで修正しようとした者もあまりいない。

---

<sup>35</sup> Michael Howard, "The use and abuse of Military History," *Journal of the Royal United Services Institute*, February 1962.

<sup>36</sup> Clausewitz, *On War*, p. 579.

そして、もしハワード教授が正しいとすると、政治的・軍事的指導者が戦闘の実相に適応しようと思うならば、自分たちがかなり正しいであろう信じている想定をも疑ってかかる心構えが必要である。そして、自分たちが臨んだ戦闘がどのようなものであるかを理解できなかった、あるいは戦力のバランスや相手の本質を読み違えたことを認識する能力がなかったがために、過去の歴史において非常に大きな困難に直面してきた。現実に適応するためには、軍の指導者と政治の指導者の両方が、戦術・作戦レベルの紛争の本質だけではなく、政治的・戦略的コンテキストについても理解する必要がある。根源的な人間の争いの本質とまったく関連のないコンセプトのようなものばかりを頭に詰め込んでいると、マティス大将が言うように、積み上がる遺体袋によって学ぶはめになる。

このような未来航路を回避する唯一の方法は、1920年代か1930年代以降、本格的に行われてこなかった将校たちへの専門的な教育に積極的に取り組むことであろう。イラク戦争に至るまで米軍が関わっていた、ばかげたコンセプトや想定が復活する可能性はほとんどない。将校団たちは嫌というほど現実主義に立たされてきたため、ナンセンスな妙策には耳を傾けないだろう。だが、時間とともに、イランとアフガニスタンでの苦い戦争体験が徐々にではあるが確実にバックミラーの中で薄れていくにしたがって、希望的観測を持った新たな世代のテクノクラートたちが登場し、役に立たないパワーポイントによるプレゼンテーションを携えておかしい「未来の可能性」を打ち出してくるだろう。各軍と統合コミュニティは本格的な専門的軍事教育の問題をどのように提起していくのか。これを抜本的に変革しない限り、またこうした戯言に耳を傾ける者が出てくるに違いない。